

優秀賞

【国語科】

言葉を大切にし、 自他を大切にする学校づくり

熊本県熊本市立植木小学校

きよ た ひろ ふみ
清田 浩文



はじめに

「美しい日本語を聞くためには、どこに行けばいいですか?」と海外の人に聞かれたら、「小学校に行けばいいですよ。子どもたちが美しい日本語を話しています」と誰もが答える、そんな世の中になることを願いながら、日々学校経営に取り組んでいる。

私たちは、情報の入手も発信も、身近な人々との愛情の交流も言葉によって行っている。ICT教育が全盛の今だからこそ、思考と表現の基盤となる「言葉」を大切にする子どもを育てていきたい。「言葉」を大切にする子どもは、「自他」も大切にせずだから。

I | 研究の主旨

主題設定の理由

少子化やSNSの普及に伴い、人と人との関わり方が変化し、同世代や趣味嗜好が合う者同士との交流が進み、日本語の乱れや若者のコミュニケーション能力の低下が叫ばれるようになって久しい。

危険な場面に遭遇したときも「やばい」、おいしい物を食べても「やばい」、おめでたい情報を耳にしても「やばい」と言ったり、好意的な気持ちを表現する際に「かわいい」を連発したりする者が、若い世代のみならず30～50代の「いい大

人」の中にも見受けられるようになった。

また、言葉が足りないためにSNS上で誤解を与えてしまい、友達とトラブルになるケースも頻発している。

上記のようなことは、程度の差こそあれ、本校においても感じている。

感想を問われても「おもしろかった」としか言えない児童がいる。

友達のよいところを褒める際に「すごい」しか言えない児童がいる。

トラブルが生じた際に、行為の理由を聞かれてもうまく説明することができずに、いら立ちを募らせる児童がいる。

友達ともめた際に、思いを伝えることができずに、なかなか仲直りができない児童がいる。

その結果、学校生活に関するアンケートをとった際に「学校は楽しくない」「あまり楽しくない」と答える児童が増加するようになる。

それらの状況を踏まえ、小学生の段階から、自分の思いや考えを正しく伝え、相手の思いや考えを確かに受け取り、互いの思いや考えを深めたり広げたりする力をつけることが急務であると考ええる。

コロナ禍で外出の機会や他者とのふれあいが激減し、児童が一人でゲームや動画視聴をして過ごすことが多くなっている。このような状況であるからこそ、読書や暗唱等の語彙を増やす活動を設け、自分の思いや考えを的確に伝え、相

手の意図を汲み取り、よりよい人間関係を構築していく力をつけていくことの必要性を痛感し、本主題を設定した。

II | 研究の内容

1 研究の仮説

仮説1

児童が読書に親しむ機会を様々な形で提供したり、児童の発達段階に応じた名文や詩歌を暗唱させたりしていけば、本に書かれた作品の世界の楽しさや、日本語の表現の豊かさ、日本語のもつリズムの心地よさを実感し、語彙を広げ、伝え合う力が高まり、自他を大切にすることが育つだろう。

仮説2

一人学びで思ったことや考えたことをペアグループで伝え合う場を設定し、アウトプットとインプットを繰り返す活動を継続していけば、思いや考えを伝えたり聞き取ったりすることに慣れ、よりよいコミュニケーションを図ることができるようになるであろう。さらに、自己の変容を見つめ「書く振り返り」を継続していけば、自他の成長を実感し、メタ認知能力が高まり、自己肯定感や他者を尊重する思いが高まるであろう。

2 研究の方法

(1) 組織の見直しと活用

研究主任を中心に、研究推進委員会を立ち上げ、校内研修の中心に国語教育を据え、語彙を増やし、思いや考えを伝え合う力を育成するために必要なことを検討し、実践に移せるようにした。また、日常指導の工夫について検討し、日々の取組の充実を図っていくようにした。

(2) 学校評価並びにアンケートの活用

取組の評価のために、年度末に熊本市一斉に実施する「学校評価」や熊本市学力調査、国語に関するアンケート調査を活用するようにした。

III | 具体的な指導とポイント

1 仮説1の検証

(1) 読み聞かせ活動の充実

本校には保護者による読み聞かせのボランティア組織がある。これまでは、読み聞かせの活動が急に取りやめになったり、一部の学級では実施されなかったりと、やや不安定であったが、会員を増やしてもらい、すべての学級に対応できるようにしてもらった。

また、毎月第二・三木曜日のいずれかの日の朝自習の時間に読み聞かせをしてもらうようにした。子どもたちは読み手のお父さん・お母さんを囲むようにすわり、より近くでお話を聞き、絵本を見ることができるようにした。

(2) 図書館指導の工夫

学校図書館指導の充実を図るため、図書館教育主任と学校司書補助の職員との連携や、他校の学校司書補助職員との交流をより密にした。

そして、図書館内外の諸掲示をより動的・機能的にし、図書館に関するポスターやニュースだけでなく、「おすすめの本」を紹介したり、各学年の多読者を知らせたり、季節にふさわしい俳句を紹介したりして、児童が常に図書館に立ち寄るような環境づくりに取り組んでいった。「図書館だより」も学校司書補助職員を中心に定期的に発行して情報発信を継続するようにした。

さらに、「ペア読書」や「夏休みひまわり読書」や「ファミリー読書」を企画して、友達や保護者も巻き込んで複数で読書に親しむ機会を設けるようにした。

(3) 全校で百人一首への取組

毎週木曜日の朝自習の時間を利用して、全校一斉に百人一首に取り組むことにした。一度に100枚を使用して実施することは時間的に無理があるため、五色百人一首を活用することにした。年度初めにPTA会長に相談し、PTAの予算で全学級分の五色百人一首を購入し、足並みをそろえ



て取り組めるように配慮した。五色百人一首では一度に20枚しか使用しないため、低学年でも無理なく時間内に終わることができると考えた。

また、「五色百人一首大会IN植木小学校」という名称で、定期的に校内での百人一首大会を実施することにした。学年差を考慮して、低・中・高学年の部を設けるようにし、昼休みに希望者を募り、トーナメント方式で開催することにした。実力差も考慮して、「エンジョイの部」も設けて順位を決めない大会も開催していくことにした。

(4) 名文や詩歌の暗唱

私自身、学級担任をしていたころから、名文・詩並びに俳句・短歌を児童に紹介し、暗唱させる取組を継続してきた。その結果、毎年児童の読解力が高まり、作文のコンテストやコンクールで多数の入賞者を出してきた。

暗唱することには、「草花の名前や感情を表す言葉など、多くの言葉を身につけることができ、語彙が豊かになる」「日本語の表現の豊かさになれることができる」「日本語のもつリズムの心地よさを実感することができる」「暗唱により身につけた表現を自分の作文や日記に生かすことができる」といったメリットがある。それらのことを踏ま

え、暗唱が語彙を増やし、「思いや考えを伝え合う力の育成」につながると考え、全校で取り組ませることにした。

全校で取り組ませるためには、全学年を対象とした作品を選び、それらを一つの冊子にするなど、かなりの労力を要する。そこで、熊本市教育委員会が作成した自主学習用の冊子「学びノート1～6年」（巻末に、児童の発達段階に応じて名文や詩歌が各学年20編収録されている）を活用することにした。各学年用の「学びノート」の巻末に掲載されている作品を、朝の会や帰りの会、あるいは家庭学習を利用して、各クラスで暗唱するようにした。さらに、20編という量に戸惑う児童や、逆にそれだけでは物足りない児童に対応するために上学年向けと下学年向けの「植木小学校今月の名文・詩」を毎月用意することにした。

児童が一人で暗唱できるようになったら、校長室に来て、校長の前で暗唱させるようにした。

暗唱に成功したら、校長は児童とグータッチをして称え、「学びノート」に掲載されている作品の空欄や「今月の名文・詩」の用紙の余白に押印するようにした。そして、「毎月の名文・詩」やすべての作品を暗唱した児童には、記念に認定書



を渡すようにした。

友達に頼らず一人で暗唱することで「緊張感を克服すること」や、全部を間違えずに言い終えることで「達成感や成就感を味わうこと」「言葉に対する親しみが湧き、表現したいという意欲が向上すること」「音声言語による表現力が高まること」等が期待できる。暗唱により、児童が様々な面で向上していくことを願って、暗唱に取り組ませることにした。

2 仮説2の検証

(1) 「一人学び」→「ペアトーク・グループトーク」 →「書く振り返り」の設定

学習中、自分の思いや考えをなかなか言えない児童や、相手の発言の内容があまり理解できない児童が各学年で多く見受けられるという実態を踏まえ、児童が「話したり聞いたりすることが好きになったり慣れたりすること」「思いや考えを安心して表出すること」「他者との交流を通じて自己の伸びや深まりを自覚すること」を意図して、以下の場を常に位置づけることにした。

- ① 自分なりの思いや考えを書く「一人学び」の場
- ② 書き出した思いや考えを友達と交流する「ペ

アトーク・グループトーク」の場

- ③ 交流により深まったり広がったりした思いや考えを整理して、自他の成長を実感し、メタ認知能力を高める「書く振り返り」の場

(2) 授業中の「伝え合う活動」の充実

授業の際に、自分なりの思いや考えを書かせ、「ペアトーク・グループトーク」を活用して全員に発表させ、互いの思いや考えを交流できるような場を意図的に設けるようにした。

特に国語の授業づくりの中で、以下の2点について工夫していくようにした。

- ① 児童が発言したくなる学習課題の設定
 - ア 児童が「考えたい」「話し合いたい」と思うような学習課題
 - イ 意見が分かれる、または、多様な考えが出てくる学習課題
 - ウ 立場を明確にさせて話し合う学習課題
 - エ 児童の学習の実態を考慮した学習課題
 - オ 45分間で児童に変容が見られる学習課題
 - ② 児童が言葉をつないでいく話し合いの実践
 - ア 児童が発言をつないでいくことで、考えを広げたり深めたりする力を育成する。
 - イ 班での話し合いと全体での話し合いの両方を重視する。
 - ウ 意図的にペアトーク・グループトークの場を設定し、互いに思いや考えを伝え合うことができるようにする。その際、気をつけるようにしたのは、「とりあえず話し合いをしよう」ということは避けるということである。
- 教師は、話し合いを何のためにするのかを、常に考えていなければならない。たくさんの考えを出させる「発散的な思考」を促すための話し合いなのか、どれがよいかを選ぶ「収束的な思考」を促すための話し合いなのか、あるいは互いの考えを基によりよい考えを構築していく「収斂的な思考」を促すための話し合いなのか、常に意図を明確にして話し合いに取り組ませることを重視するようにした。

(3) 自他の成長を実感する「書く振り返り」の継続

熊本市では、全児童にタブレットが貸与されている。しかし、その活用の推進に注力するあまり、「書く」活動が少なくなり、「筆圧が弱くなる」「作文が書けない」「思いや考えが深まらない」「自分なりの成果や課題が実感できない」といった弊害が生まれている。

そこで、本校では、学習中に必ず鉛筆で書く作業を位置づけることにした。特に学習したことをまとめたり、自己の変容や友達から学んだことを振り返りとして整理したりする作業を「書く振り返り」として、毎時間の週末に設定することにした。

「書く振り返り」をすることにより、「自己と対話すること」「既習事項を想起すること」「友達の言動から学ぶこと」「どんなことが分かる・できるようになって、どんなことが課題として残ったかを自分なりに把握すること＝メタ認知能力を高めること」を目指すことにした。

IV | 研究・実践の成果と課題

1 読み聞かせの充実を図ってみて

読み聞かせの充実を図り、年間を通じて継続していることにより、児童が集中して聞き、身を乗り出して挿絵を見つめる姿が、各学級で見られるようになった。

読書への関心が高まるだけでなく、集中力も高まってきている。

児童の主な感想は、以下のとおりである。

「いつも、どんなお話か、楽しみ」

「お父さんの読み方がおもしろい」

「いろんなお母さんのお話を聞けるから、次は誰かな? とワクワクする」

「読み方が上手なので、自分が音読するときにまねしてみたい」

「読み聞かせしてもらった本を借りて読んでみたい」

実際に、読み聞かせの後で、同じ作品や同じ

作者の本、同じジャンルの本を読む児童が増えてきた。

また、読み聞かせに来てくださるボランティアの保護者の方々が選書される際に親子の対話やふれあいが増え、児童が情緒面で安定したり、自ら進んで本を読むようになったりしてきた。

2 図書館指導の工夫を試みて

学校図書館への興味・関心が高まり、休み時間に来館する児童や、意欲的に本を借りる児童が増えてきた。学校図書館に関する掲示物を立ち止まって見ている児童も多く見受けられるようになった。

また、昨年度は、年間を通じて学校図書館の本を借りる児童が増え、80冊以上借りた児童が46人、そのうち100冊以上借りた児童が11人であった。

昨年度、貸出数の多い学級が道徳の研究授業を実施したが、どの児童も落ち着いた態度で集中して学習に取り組み、自分の思いや考えを堂々と述べていた。読書の成果が、授業に具体的な姿として現れていた。

3 百人一首に取り組ませてみて

100枚ではなく20枚の取り札を使用して定期的の実施することにより、低学年の児童も無理なく実施することができるようになった。どの学級でも、勝ち負けにこだわり過ぎることなく、純粋に百人一首を楽しむことができている。また、自然に多くの和歌を誦んじることができるようになってきており、五・七・五のリズムの心地よさを体感することができている。

百人一首を楽しみにする児童が増え、欠席児童が少なくなり、百人一首に向けて練習する児童も見受けられるようになった。

学級によっては、百人一首に関する係活動が盛んになったり、自主的に動く児童が増えたりして、それぞれの学級づくりでも効果があることが明らかになった。

4 名文や詩歌の暗唱に取り組ませてみて

以下のような多くの成果が見られた。

- ・暗唱に意欲的に取り組む児童が増え、また、暗唱に合格した児童が新たに友達を誘うことから、休み時間の度に20名以上(多い時には50名以上)の児童が、校長室での暗唱に挑戦するようになった。その結果、昨年度は年間を通じて183名の児童が20編すべてを暗唱した。(今年度は、10月19日現在で33名の児童が20編すべてを暗唱した)
- ・友達が合格すると、それを我がことのように喜んだり、初めて暗唱に挑戦する友達に付き添ってきて励ましたりする児童の姿が見られた。暗唱の合格者が多いクラスは、「きずなアンケート」(熊本市全体で毎月実施しているアンケート調査。質問項目は「学校での生活は楽しいですか」「いやなことを言われたりされたりしましたか」「周りでいじめられている人を見ましたか」「先生に相談したいことがありますか」の4項目である)で「学校は楽しい」と答える割合が高まった。
- ・日頃のあいさつや、発表の声が大きくはっきりしてきた。そのことを保護者や地域の方々も伝えてくださるようになった。
- ・授業中の音読が、はっきりした声でなめらかにできるようになったと、ほとんどの職員が実感するようになった。
- ・授業の際に、おどおどしていた児童や1時間全く発表しなかった児童が、学習中自信をもって発言するようになった。
- ・語彙が増え、作文や詩歌の表現力が高まり、多くの児童が作文や標語のコンクールやコンテストに積極的に応募するようになり、その結果、入賞者が増加した。
- ・暗唱した名文や詩歌の作者(宮沢賢治、金子みすゞ、工藤直子、川端康成、谷川俊太郎、太宰治、芥川龍之介、新美南吉、中村汀女等)や原典(万葉集、論語、五輪書、日本書紀等)に興味をもつ児童が増え、そのことが読書の幅の広がりや読破する本の冊数の増加につながった。

がった。

- ・暗唱した作品の中に出てくる「春・秋の七草」や「雨や雪・雲や風の種類(五月雨、綿雪、朧雲、木枯らし等)」「昔の言い方(数十間、蛙=かわづ等)」にふれたことにより、自然に目を向けたり、別の言い方や表現について調べたりする児童が見受けられるようになってきた。

5 「一人学び」→「ペアトーク・グループトーク」→「書く振り返り」の場を設定して

一単位時間の学習の流れが分かり、どの児童も安心して活動することができている。各学級に学習の学びにくさを感じている児童がいるが、「一人学び」の際に担任が個別指導をしたり、言葉かけをしたりすることにより、自分なりの思いや考えを書くことができるようになってきている。

6 「伝え合う活動の充実」を図って

以下のような複数の成果が見られた。

- ・相手の目を見て、うなずきながら聞く児童が増え、互いに笑顔で伝え合う姿が見られるようになってきた。
- ・自分なりの思いや考えを短時間でメモすることができる児童が増えてきた。また、簡単な質問や感想を伝えることもできるようになってきた。
- ・相手の発言に対して相槌を打ったり、「あーっ」「なるほど」といった具合に何らかの反応をしたり、「付け加えます」「似ているけど少し違います」と言いながら、関連する内容を発言したりすることができるようになってきた。
- ・コミュニケーション能力が高まり、「きずなアンケート」でトラブルを報告する児童が減少した。

7 「書く振り返り」の継続を図って

以下のような多くの成果が見られた。

- ・書くことに対する抵抗感が低下してきた。年度初めはなかなか書けない児童がどの学級でも目立ったが、スモールステップで書く量を増や

したり、ヒントを与えたりしてきたため、少しずつだか書けるようになってきた。

- 書く活動への抵抗感が薄れることにより、家庭学習においても多くの内容を書き込める児童が増えてきた。特に上学年では自学を推奨しているのだが、幅広い分野の学習をする児童が増えてきた。
- 学習が促進傾向にある児童は、短時間で長い文章を書けるようになってきた。作文においても、質量ともに向上してきた。
- 自他のよさや伸びを具体的に記述する児童が増えてきた。特に友達よさや参考になる意見を書き留め、自己の変容とつなげて記述する児童が多く見受けられるようになってきた。具体例として、6年生の児童のノートの記述を以下に示す。
- 「モアイ像やポリネシア人、イースター島などについてクラスで話し合い、みんなで意見を出していくと、私がいかがなかつたことが分かり、新しい考えが出てきて、楽しかったです。」
- 「最初は、数世代後の子どもたちのことを考えるのが大切だと思っていましたが、ゆりさんの意見を聞いて、子孫ばかりではなく、祖先も大切にしなければいけないことに気づきました。子孫に集中せず、バランスをとっていくことが大切だと思いました。」
- 「自然の利用方法を誤ると生態系だけでなく文化も人の心も荒れ果ててしまうので、花音さんの『生活は大切だがその他の大切なものも忘れないようにしたい』という意見はとても大事なななと思いました。」

*以上「イースター島にはなぜ森林がないのか」の学習より

- 「愛子さんは、『クルルを助けなかつたら見殺しにしていた』というところまで考えていて、深く考えているななと思いました。」
- 「今日の学習で『死を覚悟して』と言っている人が多かつたです。それだけ『後悔してい

る』ということを読み取っている人がいて、すごいと思いました。」

- 「カララは自分の考えに正直になりました。私はみんなと意見が違ふと自分が間違っていると思つて流されることがあつたので、カララのように多数にも立ち向かえる人になりたいです。」
- *以上「風切るつばさ」の学習より

- 「私は、天音さんの『決めたことは貫く』という意見にとつて納得しました。その理由は、太一が強くて優しいだけではなく、決めたことは貫く誠実な人だと気づけたからです。」
- 「私は、心晴さんの『悲しみをおさえられる強い心をもっている』という意見に納得しました。私は『太一は優しく海が好きの人だ』と思つていて、強い心をもっていると思つたから、『なるほど!』と思いました。」
- 「母の悲しみを背負うとは、自分が瀬にもぐると母を悲しませることは分かっているけど、父のかたきをとるために瀬にもぐつてクエをとつて母を安心させたいといういろいろな気持ちが混じっていることが、悠羽さんや悠斗さん、晋作さんの意見を聞いて分かりました。」
- 「初めて『海のいのち』を読んだときは分からないことがたくさんありましたが、音読を繰り返して何度も読んでいくと、最初に見たクエと最後に見たクエの目の色が違ふことに気づけたりして、深く分かりました。」

*以上「海のいのち」の学習より

8 熊本市学力調査の結果が向上

令和2年度、熊本市学力調査における本校の結果は、4年生の国語以外は全国平均を下回っていた。

しかし、3年度4月から本実践に取り組んだことにより、以下のようにどの学年でも国語と算数の両方において向上してきた。6年生においては、社会や理科でも前年度と比較して伸びが著しい。

全校で、一人一人の語彙を増やし、児童が互いに豊かに関わり合うように、読書・百人一首・

暗唱・伝え合う活動・書く振り返り等の様々な活動を重ねてきた成果が数値となって現れたと言えよう。

9 自他を大切にしている児童の増加

令和3年度末の学校評価の結果、「友達への思いやり」（友達と仲よくしていると思いますか）において、保護者も児童も「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合が、90%を超えた。

児童の自己肯定感が高まり、友達関係における不安も薄れ、毎日休まずに登校した児童が、388人中231人であった。不登校傾向の児童が6年生だけで7人いたが、全員が卒業式当日出席することができた。1～5年生でも7人いたが、全員が出席できるようになった。

10 今後の課題

研究に取り組んできた結果、上記のような成果は得られたが、「児童の読書量が増えた」「暗唱に意欲的に取り組んだ」「表現力が高まった」と言えるのは全校児童100%ではない。自他を大切にできるようになったが、不登校傾向の児童が0ではない。

今後、児童一人一人をよりきめ細やかに見つめ、全校児童が自他を大切にしようさらに手立てを工夫していく必要がある。